

歌わない歌唱は、温かく心に寄り添ってくれる。声の色、動き、音程（数カ所の事後的低さ以外）、タイミングすべてが、クルレンツィスの指揮する両手が操る生き物のように合致していた。ロドルフォのレオナルド・カバルボも、テノールにとってはより難しいであろう、この歌唱の傾向を全力で実現していた。他の歌手たちもうまく、皆が主役のようなバランスであった。ベルミ歌劇場とバーデン＝バーデン祝祭劇場の共同制作だからか、フィリップ・ヒンメルマンの演出は凍てつくようで華がないが、音楽の邪魔もしないので救われた。

「嘘のない演奏」、「ディアギレフ音楽祭のテーマは愛」、「人と同じ事しか総譜から読めなければ、指揮はルーティンワーク」という、今までのインタビューで彼が語ってきた言葉に裏付けられたクルレンツィスのポエムに心を掴まれた。

(中 東生)

Opera 芝居よりも目を惹く、クルレンツィスの《ポエム》の指揮

鬼才テオドール・クルレンツィスが、ブッチェニの中でもいちばん甘い《ポエム》をどう料理するのか、想像もつかないまま客席についたが、その音楽は純朴なまでの讃歌だった（11月12日所見、バーデン＝バーデン祝祭劇場 テオドール・クルレンツィス指揮ムジカ・エテルナ、カントゥス・ユヴェスム・カールスルーエ児童合唱団）。

聴き慣れたこのオペラで、オーケストラから今まで目立たなかったフレーズを浮き立たせ、テンポが遅くなっても細部まで愛情をこめて構築していくオーケストラだけで音楽的に完結しており、冒頭の男声歌手たちが邪魔に聴こえてしまうほどだ。視覚的にも、小節ごとに振らず、一音一音魂をこめて振る場面も多く、職人技で音色を創り上げていくクルレンツィスの後ろ姿の方が、舞台上で展開している芝居よりも目を惹く。オペラとしての継続意義を危惧し始めたころ、ミミが登場し、世界が変わった。

ザリーナ・アバエヴァはクルレンツィスの信頼を得ているベルミ歌劇場の歌手だが、誤解を怖れずに告白すれば、今までに、これほど自分の中のミミ像を歌で実現してくれた歌手はいなかった。全幕を通して数えられるほどしかフォルテで



いるいると衝撃的だった、クルレンツィス指揮によるバーデン＝バーデン祝祭劇場の《ポエム》